

# 援助が終わっても帝国は続く

Marjorie Namara Rugunda

Z ネット 2025 年 4 月 30 日

<https://znetwork.org/znetarticle/as-aid-ends-empire-endures/>

欧米の援助機関（ドナー）は予算を削減しているが、彼らが構築した支配、依存、脱政治化に根ざした援助モデルは依然としてアフリカの開発を形作っている。

ここ数ヶ月、欧米各国政府は対外援助戦略の見直しを声高に叫んでいる。アメリカは、"外国援助産業"が"調和的で安定した関係に反する"価値観"を助長して世界平和を不安定にすると主張し、対外援助の大幅な削減を発表した。

一方、英国政府は、国防費を優先する必要性を理由に援助予算を削減した。世界第 2 位の援助国であるドイツも、最近の選挙を受けて援助支出の削減を示唆している。これらの削減の動きでアフリカ諸国がどうなるかについての議論を巻き起こっている。一部のコメンテーターの中には、これを警鐘としてとらえ、アフリカ政府に自立を促し、最終的には欧米のドナーに頼ることなく主権システムを構築するよう求めている。

しかし、主権を求める声は、援助の歴史や大陸における NGO の役割と切り離すことはできない。これは単なる予算削減の問題ではない。援助と開発がいかにアフリカの国家を空洞化させ、政治闘争を援助国（ドナー）主導のプロジェクトに置き換えてきたか、支配の道具として機能してきたかについて、より深く考えることが求められている。援助は単なる予算項目ではない。今回の

削減は、過去からの脱却というよりも、アフリカと欧米の開発モデルとの関わりを長年規定してきた、より深い依存の構造を露呈させた。

対外援助が支援や連帯のためであるという考えは、常に慎重に構築された幻想であった。2002年、Firoze Manji と Carl O'Coil の2人は、共同論文「宣教師の：アフリカにおける NGO と開発」の中で、NGO を「新自由主義の宣教師」と呼び、単なる中立的な援助者ではなく、改革の旗印の下にアフリカ諸国家を再編成するシステムの重要な担い手と呼んだ。

この主張は今日でも十分に通用する。2人が明らかにしたのは、特に1980年代に国際通貨基金（IMF）と世界銀行によって導入された構造調整プログラム（SAPs）によって、いかに公共支出が削減され、国家機能が民営化され、地方のインフラが根こそぎ破壊され、残された空白を NGO がすぐに埋めようと動いたかということである。非政府組織は、アフリカの人々と政府との間の主要な接点となったが、国家が開発機関と国際ドナーに取って代わられた。

## 別の手段による植民地支配

重要なことは、マンジとオコイルが、NGO の台頭が単なるソフトパワーの物語ではなく、別の手段による植民地支配の継続であったことを示していることである。1960年代から1970年代にかけてアフリカ諸国は独立を果たしたが、旧植民地勢力は消滅したのではなく、ブランドを変えたのである。帝国のあからさまな人種的ヒエラルキーは、「開発」という新たな言葉に取って代わられた。NGO はこの時、撤退する植民地行政が残した空白を埋めるように登場した。「開発」という言葉が「文明化ミッション」に取って代わったが、支配とパターナリズムの力学は残った。援助という名目で、NGO はアフリカの人口と領土を管理し続けた。

アフリカの非政府組織（NGO）は、主に外国からの支援を受けて、学校、診療所、食糧プログラム、さらには道路を提供した。しかし、マンジとオコイルが示すように、これは中立的で慈悲深い介入ではなかった。NGO は政治的なものを技術的なものに置き換えた。彼らは貧困を、世界的な不平等や経済モ

デルの失敗の結果ではなく、技術と資源の問題として捉え直した。かつては解放と再分配の政治プロジェクトであった開発は、外国資本の組織に委託される経営的な仕事となった。

## 政治を技術に転換

この転換は制度的なものだけでなく、言語的なものでもあった。マンジとオコイルが強調するように、開発の言葉そのものが変容した。エンパワーメント」、「キャパシティビルディング」、「参加」といった流行語から政治的な内容が取り除かれ、非政治的な統治手段として再パッケージ化された。その言説はもはや正義や構造的な不平等を語るものではなく、効率やベストプラクティス、成果物を語るものとなった。そうすることで、開発は人々とともに、あるいは彼らによってなされるものではなく、人々に対してなされるものとなった。このことは、NGOがグローバルな不平等構造の中で活動し、それを再生産する手助けをしながらも、NGOを中立的なアクターとして正当化するのに役立った。

米国際開発庁（USAID）は、このモデルを制度化する上で重要な役割を果たした。USAIDは長い間、アフリカ全土のNGOに対する最大の資金提供者のひとつであった。透明性と政治的関与が期待される政府への直接支援とは異なり、NGOを通じて資金を提供することで、アメリカやイギリスのようなドナーは、よりコントロールしやすく、複雑さも少なく、世間の監視も受けにくい。国家機関を完全に迂回しながらも、開発の優先順位と実施を形作ることができた。

この論理は今日も続いている。ワシントンやロンドンとウガンダ、ケニア、エチオピアのような国々との政治的関係が緊張状態に陥っても、彼らの援助プログラムによって資金提供されているNGOのインフラはそのままである。例えば、ウガンダでは、USAIDは教育、農業、保健における何百ものイニシアチブに資金を提供してきた。こうした取り組みの中にはサービスを提供するものもあるが、政府を傍観し、アフリカの一般市民を主体者ではなく受益者として扱う開発モデルを象徴するものでもある。

だからこそ、今この瞬間は緊急であると同時に、誤解を招きかねないのだ。そう、アフリカ諸国は独立したシステムを構築しなければならない。しかし本当の問題は、単に資金が失われたことではなく、資金が残した遺産なのだ。何十年もの間、対外援助は説明責任を選挙で選ばれた政府から外国ドナーへとシフトさせる手助けをしてきた。援助は貧困を非政治化し、依存を制度化した。

## 構造的依存のモデル

そこで浮かび上がってくるのは、主権のモデルではなく、構造的依存のモデルである。マンジとオコイルは、NGOは動員ではなく「平和化の道具」と表現する。人々に正義や変革を求める力を与えるどころか、反対意見を打ち消し、専門化されたサービス提供にエネルギーを振り向け、結局のところ、そもそも低開発を生み出したグローバルなシステムを守っている。

USAID や英国が援助から撤退しても、この現実は覆えない。では、どうすればいいのか。この瞬間は、単なる批評ではなく、戦略を求めている。

「外国援助の撤退による主権の回復」が、欧米の支援者を民間投資家や新たな地政学的後援者にすり替えることであってはならない。それは、公的機関を再建し、SAP 時代の新自由主義的残骸に立ち向かい、国家の NGO 化を拒否することでなければならない。

しかし、そのビジョンは自動的に実現するものではない。アフリカの国家内部で、市民社会全体で、そしてグローバルな場での政治的闘争が必要となる。援助が開発を非政治化する一助となったのであれば、援助を超えることは、開発を再び政治化することを意味する。

NGO モデルは、それを生み出した援助の流れよりも長生きした。それは、アフリカ諸国に点在する診療所、学校、コミュニティ・プログラムの中で生き続けている。多くの場合、必要な活動を行なっているが、常にドナーによって定められた制限の中で行なわれている。マンジとオコイルは、これを解放と勘

違いしてはならないと警告する。 援助予算が削減される中、今後の課題は単に削減を乗り切ることではなく、そもそも削減を重要視するシステムを拒否することである。

原文 Africa is a country に掲載。

<https://africasacountry.com/2025/04/as-aid-ends-empire-endures/>

筆者のマージョリー・ナマラ・ルグンダは作家、研究者、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学博士課程在籍。

【翻訳チェック 田中靖宏】